
登場人物紹介

マット・スカダー	マンハッタンを根城に生きる私立探偵
エレイン・スカダー	マットの妻
TJ	黒人の若者。マットの右腕
マイケル・スカダー	マットと前妻との長男
アンドルー・スカダー	マットと前妻との次男
バーン・ホルンダー	マンハッタン在住の裕福な弁護士
スーザン・ホルンダー	バーン・ホルンダーの妻
クリスティン・ホルンダー	ホルンダー夫妻の長女
カール・イワンコ	ホルンダー夫妻殺害の容疑者
ジェイスン・ピアマン	ホルンダー夫妻殺害の容疑者
ライア・パークマン	スーザン・ホルンダーの姪
ピーター・メレディス	クリスティン・ホルンダーの元恋人
ジョー・ダーキン	ミッドタウン・ノース署の刑事
ヘレン・ワトリング	ジェイスン・ピアマンの母親
ダニー・ボーイ・ベル	マットの旧友の情報屋
アイラ・ウェントワース	ニューヨークの刑事
シーモア・ナドラー	精神科医

七月最後の月曜日、見事な夏の宵だった。ホランダー夫妻は六時から六時半のあいだにリンカーン・センターに着いた。どこかで——まあ、広場の噴水のそばか、エイヴァリー・フイツシャー・ホールのロビーで——落ち合つて、階上カッに上がったのかもしれない。バーン・ホランダーは弁護士で、エンパイア・ステート・ビルディングにオフィスを構える法律事務所パトナの代表弁護士のひとりだった。だから、もしかしたらオフィスから直接来たのかもしれない。男性客の大半はビジネス・スーツ姿だったので、着替える必要はなかった。

五時前後にはもう彼はオフィスを出ていた。彼らの家は西七十四丁目通りに面して、コロンバス・アヴェニューとアムステルダム・アヴェニューのあいだにあつたので、家まで妻を迎えに行く時間は充分あつた。ふたりはリンカーン・センターまで歩いたのかもしれない。彼らの家からリンカーン・センターまでは半マイル、歩いて十分たらずの距離だ。エレインと私は歩いた。九番街五十七丁目の私たちのアパートメントから歩いていった。ホランダー夫妻の家は私たちが住んでいるところよりいくらか遠い。だから歩こうとは思わなかつたかもしれない。タクシーをつかまえたか、あるいはコロンバス・アヴェニューを南に下るバス

に乗ったか。

来方きかたはどうであれ、夕食前のカクテルの時間には間に合っただろう。バーン・ホランダ―は背が高く、六フィートを二インチ超え、歳は五十をふたつ超え、逞たくましい顎に秀でた額をしていた。若い頃にはスポーツが得意で、今でもミッドタウンにあるジムに定期的にかよっていた。それでも、さすがに中年になってからは、腹のあたりにいくらか贅肉がつくようになっていた。ハングリーな若者も今や見るからに裕福そうな堂々たる恰幅かつぶくの紳士というわけだ。黒い髪は、もみあげに白いものが混じり、人から用心深いと評されそうな眼をしていた。それはおそらく彼が話すより聞くことに時間を多く費やすタイプだからだろう。

夫人もまた口数の少ない人だった。可愛い娘が齡よわいを重ねて、凜々しく美しい女に変身する――そんな感じの女性だった。部分的に赤く染めた黒い髪は肩までの長さがあつたが、うしろにやっているので、顔にはかかっていない。夫より六歳若く、背は六インチ低かつた。その差はハイヒールでいくらか埋め合わされていたが、体重は二十年余の結婚生活で数ポンド増えていた。が、若い頃はファッション・モデル並みに痩せていたので、むしろ今のほうがほどよく見えた。

エイヴァリー・フィッシャー・ホールの二階で、白ワインを注いだグラスを片手に、トレ―からオードブルを選んであるふたりの姿が眼に浮かぶ。私自身ふたりを見かけている可能性がきわめて高い。バーン・ホランダ―とは、もしかしたら会釈と笑みを交わし合っていたかもしれない。魅力的な女性には誰もが気づくように、夫人にも眼をとめていたかもしれない。

い。彼ら同様、私とエレインも数百の人々に混じって、その場にいたのだから。実際、あとでふたりの写真を見たとき、かすかに見覚えがあった。だからといって、ふたりを見たのがあの夜だったとはかぎらないが。別の夜にリンカーン・センターかカーネギー・ホールで、ふたりを、ふたりのどちらかを、あるいは、ふたりが近所を歩いているのを、見かけたことがあったのかもしれない。私たちは互いに一マイルと離れていないところに住んでいたのだ。何十回と見ていながら、ことさら意識したことはなかったのかもしれない。あの夜もそういうことだったのかもしれない。

友人知人には何人かに会った。レイとミッシェル・グルリオウ夫妻とはエレインとふたりで立ち話をした。エレインは、彼女が何年かまえにメトロポリタンの夜間講座を受けたときのクラスメイトと、彼女の画廊の顧客——おそろしく生真面目な夫婦——を私に紹介し、私は彼女に、△三十一人の会△で知り合った、不動産業界の大物エイヴァリー・デイヴィスと、オードブルのトレイを持ってまわっていた、セント・ポール教会のAA（アルコール自主治療会）仲間のひとりを紹介した。彼の名前はフェリックス。苗字は知らない。彼のほうも私の苗字を知らないはずだ。

ニュース・キャスターのバーバラ・ウォルターズや、ソプラノ歌手のベヴァリー・シルズといった、顔と名前だけ知っている著名人も何人か見かけた。ニューヨークのサマーミュージック・フェスティヴァルの初日。曲目の大半はモーツァルトで、カクテルとダイナーは後援者をもてなすためのものだった。後援者はフェスティヴァルの運営資金に二千五百ドル以

上寄付して、その地位を手に入れていた。

まだ「働いて」いた頃、エレインは貯めた金を市のあちこちの賃貸住宅に投資していた。ニューヨークの不動産業界というのは、何もかもことごとく誤ってしまふような人間にも負けない世界だが、エレインはそんな世界でほとんど正しいことばかりをして財を築いたのだった。われわれが「パーク・ヴェンドーム」にマイホームを買うことができたのはそのおかげだ。クウィーンズのアパートメント・ハウスからは今でも十分な家賃収入がある。だから、金ということに関して言えば、われわれはもう働かなくてもかまわない。もちろん私には探偵という仕事があり、彼女もわれわれの家から九番街を南に数ブロック行ったところには画廊を持っていて、ふたりともその仕事を愉しんでいる。また、金のつかい道というのはいくらでもあるものだ。それでも誰も私を雇ってくれず、誰も彼女からアンティークを買ってくれなくても、われわれは食べるのに困るということとはもはやなくなつた。

それで、はいつてくるものからなにがしか、放り出すのも悪くないと思つたのだ。何年もまえ、収入の一〇パーセントをたまたま眼についた教会に寄付するという習慣が私にはあつた。その習慣がその頃よりいくらか洗練されたものになつたというわけだ。今でも金を処分する方法を見つけつけていることに変わりはない。

エレインは芸術家を支援するのが好きで、オペラや個展の初日や美術館の展覧会に私よりはるかに頻繁に足を運んでいる（その分、野球やボクシングを見に行く回数も私より少ないが）。ただ、われわれには音楽という共通点がある。クラシックとジャズだ。ジャズ・スポ

ツトが寄付を求めてくることはない。寄付にあたるものはカヴァー・チャージということになるだろうか。そういうものを別にして、毎年、私たちはリンカーン・センターやカーネギー・ホール宛てに少なからぬ額の小切手を振り出している。寄付を受け取るほうは、寄付する者の寄付する意欲を鼓舞するために、さまざまな特典をわれわれに与えようとする。その夜の催しはそんな特典のひとつだった——飲みもの、席に着いて食べるディナー、コンサート初日の招待券。

六時半頃、私とエレインは決められたテーブルに着き、同席した三組のカップルと互いに名前を名乗り合い、食事のあいだ楽しいおしゃべりをした。尋ねられれば、そのテーブルの同席者全員とは言わないまでも、大半の名前を思い出すこともできなくはない。が、そんなことをしてもなんの意味もない。彼らがこの話で重要な役割を演じることはない。バーンとスーザン・ホランダ夫妻は私たちのテーブルにはいなかった。

彼らは別のテーブルに着いていた。あとからわかったことだが、私とは部屋の反対側のテーブルだった。だから、食事のまえに見かけたということは考えられても、食事中の彼らを見た可能性は低い。コンサートのあいだも、彼らの席は私たちの二列前だったが、中央席の一番右側で、私たちのほうはどちらかと言えば左寄りだった。だから、休憩時間にトイレで出くわしてでもないかぎり、どこであれ、私たちは実際には彼らを見かけてはいないのだらう。

料理は最高の部類で、同席した人たちも楽しい人たちだった。コンサート自体も大いに愉